

後編

家族で走り抜いた二十三月

神社の桜が満開で、美子はスリランカの友人たちに写真を送って日本の春を伝えた。

二〇一九年春、太郎の赴任地スリランカ・コロンボに渡った恵子、美子、英子はテロのためひとりで帰国したが、夏の終わりにスリランカに戻り、子どもたちはイギリス系のインターナショナルスクールに通った。

ところが半年後、コロナウイルス感染拡大のため再度一時帰国を余儀なくされる。

後編ではコロナに翻弄された家族の生活を追う。(仮名)

取材・文 高田 和子

コロナ禍で一斉強制退去

二〇二〇年二月、新型コロナウイルスの感染拡大により美子と英子が通うインターナショナルスクールはオンライン授業になってしまった。転校して半年弱、ESLではなく普通クラスのオンラインで授業を受けなければならぬのはふたりにとって負担が大きかった。

やがて町はロックダウン。買い物をするのも難しくなった。スーパーは開いたり閉まったり。「明日半日開ける」と聞き、

朝六時半から並んで十二時前ギリギリにスーパーに入り、残っている物を買おうということもあった。

感染拡大初期、中国人や東アジア出身の人たちへの差別もあった。

「トゥクトゥク(三輪自動車のタクシ)に乗ろうとしたら『チャイナ』と叫ばれて乗車を拒否されたことがあり、ショックでした」と恵子。

三月はじめ、会社の方針で随伴家族の全世界一斉強制退避が決まった。準備も慌ただしく友人たちに「さようなら」も言えず一週間後に帰国した。

「その時点では、スリランカは数字的には感染を抑え込んでいたので、わざわざ日々感染者が増えつつある日本に帰ることは、私も、

特に子どもたちは納得がいきませんでした」と恵子。

成田空港に到着後、二週間の隔離を経て緊急事態宣言発令の翌日に恵子の実家に落ち着いた。幸い近くの

日本では全国一斉休校に入っていたがインターナショナルスクールではオンラインの授業が続いていた。テロ避難で帰国したときに通っていた学校は六月から分散登校が始まり、美子と英子はインターナショナルスクールのオンライン授業を受けながら日本の学校にも通うというハードな生活を送ることになった。

太郎にとっても、長いロックダウンの時期をひとりコロンボで過ごすつらい日々だった。

リビングが教室に

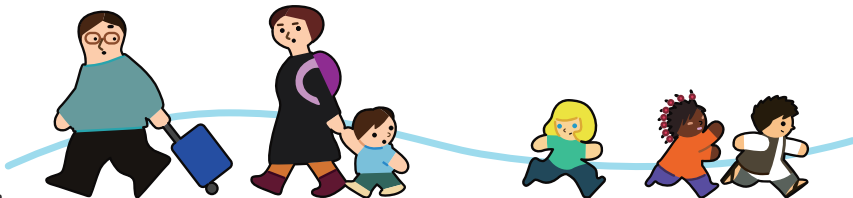
九月になり、スリランカは比較的落ち着いていたので再度コロンボへ。

空港に着陸直後、まず半屋外の検査場でPCR検査を受け、その後手荷物に消毒液をビチャビチャかけられ、新しく支給されるマスクとゴム手袋をはめて、空港建物内へ。その後バスでどこかに向かつて出発した。携



空港から隔離施設に向かうバスの中で

Illustrated by
Reona Nishinaga





コロナボの自宅に戻ったあともリビングでオンライン授業



スリランカで隔離されたホテルで勉強するふたり

のは着陸後六時間近くたってから。そして十四日間部屋から外に出られない状態でオンライン授業に取り組んだ。「食事の時間には三人そろって楽しめるYouTubeを見たり、ラジオ体操をして体を動かしたりして気分転換しました」と恵子。

隔離が明けて帰宅したあともオンライン授業が続き、「リビングが教室」という日々がいつしか日常になった。つねに家族いっしょに変化の乏しい生活を送るなか、恵子の役割は大きかった。

「家族が喜ぶ食事をつくるのが私の仕事だと思って、パングクリを始めたり、肉まんやピザをつくらしたりして変化をつけました。それから話の聞き手になったり、日本の勉強をい

帯の位置情報で行き先を見て、コロナボから近い街に向かっていることだけは確認できた。心配している太郎に連絡し、ほっとひと息ついた。手続きに時間がかかり、部屋に入れた

つしよにやったりしました」先の見えない毎日でもたちが「ここにいたくない」と思うのは避けたいと、気持ちよく暮らせるように心がけた。「それでも我慢の連続で、不満があっても飲み込むしかありませんでしたが」十一月ごろから対面授業が再開した。美子の学年の生徒はそのまま登校したが、英子の学年は二週間ほど登校してまたオンライン授業になってしまった。英子はその間、数日通ったあと「行きたくない。怖い。人との距離がわからなくなった」と言いだした。恵子は何と声をかけたらいいのかわからず、無理に行かせようとしてしまった。あとから考えると、長い間クラスメイトと顔を合わせていないのだから前と同じように登校させるのは酷だったのかもしれない。恵子は「あのときの対応はいまでも後悔していません」とふり返る。

様子を見ながらの旅行

鬱屈した毎日だったが、国内旅行はできたので様子を見ながらたびたび車で旅行をした。世界遺産シーギリヤロックは岩の頂上に王宮跡と庭園などがある。空中の宮殿といわれるこの岩は二〇〇段の巨大な一枚岩で、階段は二〇〇〇段もある。太郎たち家族は早朝陽が登りはじめた

ころからアタックした。頂上から辺りを見下ろしたときの天下を掌握したような気分は爽快だった。いつもなら外国人観光客が押し寄せ、細い階段は何時間も待つことになるが、コロナ禍が不幸中の幸いで、自分たちのペースで登ることができた。

スリランカには寺院が多いが、行く先々にサルがいた。ダンブッラでは持っていたお供え用の花をサルが襲ってきて、一瞬怯んだ隙を見て仲間たちも加勢してきた。慌てて花を投げ捨てたが、美子はサルに腕をつかまれてしまった。

「それ以降、動物園には行きたくないというほどのトラウマになりました」紅茶の産地ヌワラエリヤでは、ハイグロウンティーがとれる。「スッキリした渋みの少ない紅茶はカルチャーショックに近いようなおいしさでした」と恵子。

お茶摘みでは、お茶の葉の先端にある芯芽と、その下の二枚の葉を摘む「一芯二葉」を実際に目にして感激した。

恵子は「落ち着かない日々のなかで、ゆったりと時間が流れる風景が子どもたちの心に残るといいな」と思った。

受験準備

中学生の美子にとって高校受験は避け

ウッドウワのビーチで



られない。日本に退避した時期もあり、滞在期間のカウントの仕方によっては帰国卒の受験資格が得られないかもしれない。インターナショナルスクールでの成績は帰国子女受験のために必要なし一般受験のために日本の勉強もしなければならぬ。どちらを向いても道は険しく、インターナショナルスクールの勉強と日本の大手塾のオンライン授業や通信教育に取り組み日々だった。

「孤独な闘いが続いたので、本帰国後に通塾したときは仲間といっしょに勉強できてとてもうれしかった」そうだ。

英子の場合、高校になったら帰国受験はできないので中学で受けてみようということになった。やはり大手塾の通信教育やリモート授業などで「人生で初めて死ぬほどがんばった」と言うほど全力投球した。

二〇二一年十二月、美子は対面授業が続いていたが



世界遺産シーギリヤロックへ早朝アタック

三十三カ月をふり返って

英子はオンラインのまま本帰国になってしまった。ふたりともインターナショナルスクールの成績も残せたので、コロナの特例として帰国卒の受験資格を得ることができ、希望する学校に見事合格した。

美子と英子は「キラキラしたインター生活の思い出は皆無に等しく、ただただたいへんでつらかった」と口をそろえて言う。

「唯一無二の経験、と頭ではわかっていても、とてもまだ『よい経験になった』とは思えないようです」と恵子。

「とはいえ、美子は短いなかでもスリランカの文化を肌で感じ吸収していた。

「マルチリンガルがあたりまえで、複数の宗教が混在する環境で暮らすスリランカの人たちにとって、新しい文化に触れることは『普通』です。加えて、新しいものを吸収することにとっても貪欲です。そんな環境のなか

で自分の『普通』にこだわるのはあきらめ、この『カオス』に身を任せることの楽しさを学びました」

そして世界にはいろいろな英語を堂々と話している人たちが多いことも知った。現在、学校でアメリカ英語を話す帰国子女仲間にもまれて、誇りを持ってブリテッシュイングリッシュで通している。ときには抑揚の豊かなスリランカ英語も披露して独自路線を行っている。

また、スリランカ人の友人が来日する予定があり再会を楽しみにしている。

英子は「生きてるだけで精いっぱいだった」とふり返る。受験が終わって、体が鉛のように重くなって起きられなくなる日が続いた。いまは学校の理解を得て長期にわたって休んでいる。

受験が終わったらやりたいと思っていた切りに集中していると気分が落ち着くそうだ。細かいところまで気を配った素晴らしい作品だ。

「中学受験は『がんばってやれば自分にもできる』と思える大切な経験のはずです。その自信とプライド、そして愛校心は家族に伝わってきます」と恵子。

現在、少しずつ前に進んでいけるよう、家族で見守っている。

テロとコロナ禍、二つの大きな出来事に翻弄されながら家族で走り抜いた三十三カ月だった。

本欄では取材対象家族を募集しています。48ページのEメールアドレスへお気軽にご連絡ください。